

2020年5月3日 礼拝説教要旨

詩編講解説教13 「主よ、いつまでですか」

詩編13：2～6、Ⅱコリント6：4～10

第13編は嘆きの詩というジャンルに入ります。4節に「死の眠りに就くことのないように」とありますから、この詩人は何かしらの病いにより死の不安、恐れの中にあつて、苦しみ嘆いていると理解することができます。しかもその苦しみがなかなか去らないので、詩人は「いつまで」という言葉を4回も繰り返しています。それだけ詩人の心境が切羽詰まったギリギリの状態であるということでしょう。畳み掛けるように、いつまでこの状態が続くのかと神さまに訴えています。

しかしこのような嘆きはこの詩人特有のものではありません。特にこの詩人の心境は現在のわたしたちと重なるところがあります。今のこの状況がいつまで続くのか。わたしたちもまさにその間の中にあります。教会では現在「分散礼拝」の形式で礼拝をまもっています。これは礼拝を中断させないための苦肉の策ではありますが、これで信仰が保たれるとは到底思えません。何よりわたしたちは信仰の弱さを緩和する手だてであるところの聖餐に与ることができません。この状態が長く続けば信仰が弱まるのは確実です。わたしたちはいつまでこの状況に耐えなければならないのでしょうか。

しかしこのようなウイルスの蔓延する前から、すでにこのような状況を経験されている方々もおられます。教会の中の病いを得ている方々、一過性の病いではなく、長く闘病されている方々です。それこそいつまで続くのか分からない痛みを耐えて日々生活しておられる方、薬を調整しながら回復を待っておられる方、完治することのない病いとうまくつきあいながら生活をされている方。多くの方々が出口の見えない長いトンネルの中に入り込んだような気持ち、息の詰まるような閉塞感を感じていらっしゃるのです。ある方は「神さまに向かって叫びたくなる」とおっしゃっておられました。この災禍の中でわたしたちもそのような心境をわずかでも想像することができます。ですからこの詩人の「いつまで」という問いはわたしたちの誰もが経験する切実な問いなのです。

この長引く困難がわたしたちに三つの危機をもたらすことをこの詩は示しています。まず神さまとの関係の危機があげられています。それは信仰の危機と申し上げてもよいでしょう。「主よ、わたしを忘れておられるのか」（2節）もはや自分は神さまから忘れ去られていると考える。例えば一人暮らしの方でほんのわずかな間でも誰からも何の連絡もない、訪問もないなら「自分は忘れ去られている」と感じてしまうでしょう。まして長く孤独を感じる状態なら神さまさえも自分を見放したと考えてしまう。そういう信仰の危機があります。

二つ目は自分の存在の危機です。「わたしの魂は思い煩い、日々の嘆きが心を去らない」とあります。「魂」はネフェシュ、人間存在の一番深い部分のことです。神さまが人間をお造りになられた時に「命の息」を吹き入れられた。その命そのものが煩うということです。実際にこの長引く自粛生活の中で極度の不安とストレスにより精神を病むことが起こっています。ここでの「魂」はそのもっと深い部分ですが、しかし自分の存在そのものが危機に瀕していることに違いありません。

そして三つ目は他者との間の危機です。「敵はわたしに向かって誇る」とあります。そこには「敵」という他者の存在があります。この詩人がダビデならそれはサウルであったかもしれません。サウルの執拗な攻撃に悩まされ、ダビデは極度の不安と緊張に押し潰されそうでした。そこで疑心暗鬼に陥り、誰も信頼できない状態になります。昔から病いは人間の差別感情を露にしてきました。ハンセン病もそうですし、今の新型コロナウイルスでもそうです。感染者が出たとなればまるで「犯人探し」のようことをして、人格を否定されるような扱いを受ける人も少なくありません。そのようにして他者との関係も危機に陥ります。神さまとの関係、自己との関係、他者との関係。この三つの関係が破綻するという危機は人間にとってもっとも深刻な状態です。そして悪いことにこの三つは常に連動しており、別々にあるというよりは、合わさった形でわたしたちに襲いかかるのです。そこに罪の怖さ、根深さがあるのです。

では、詩人はこの状況に完全に押し潰されてしまうのでしょうか。13編を読むと驚くことにこの詩人の中に少しずつ変化が起こっていることに気づかされます。その転換点はまず4節です。「わたしの神、主よ、顧みてわたしに答え、わたしの目に光を与えてください」「顧みる」というのはこちらを向くということです。神さまが御顔を隠されるのではなく、自分の方を向いてくださることを素直に期待しています。それは神さまが他でもない「わたしの神」だからです。それはただ恵みによってわたしたちを顧み、わたしたちを「わたしのもの」とされることに基づく信仰の告白です。よみがえりの主イエスにトマスが「わたしの主、わたしの神よ」（ヨハネ20：28）と信仰告白をしたのと同じです。それは主イエスのよみがえりを信じることのできない不信仰なトマスをも十字架の贖いとよみがえりの命によって「わたしのもの」とされる恵みゆえにトマスの中に起こされた神さまへの信頼に他なりません。その信仰をこの詩人は先んじて告白しています。

そして決定的なのは最後の6節です。「あなたの慈しみに依り頼みます。わたしの心は御救いに喜び踊り、主に向かって歌います。『主はわたしに報いてくださった』と」（6節）新共同訳には訳されておりませんが、原文では逆接の接続詞ワウが付いていますから「しかし」という言葉が冒頭に入るべきです。これは前の節からの完全な転換を意味しています。その根拠は何より神さまの「慈しみ」（へセド）です。神さまがわたしを憐れんでくださる。慈しみを与えてくださる。詩人はそこに信頼しきっています。いつまで続くのか分からない過酷な現実の中で、それでも神さまを信頼する。それはわたしたちの中の強い信仰ではありません。神さまがわたしたちを慈しみ、「わたしのもの」としてくださる恵みゆえです。そしてそのことはイエス・キリストによってわたしたちに確かなものとなりました。イエス・キリストはわたしたちの罪を赦し、ただ恵みによってわたしたちを神の子として迎え入れてくださいました。ローマの信徒への手紙に「従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは死んだ人にも生きている人にも主となられるためです」（ローマ14：8～9）とあります。十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちは無条件で主のものとなされました。この救いが長引く困難をも耐え忍ぶことを可能にするのです。

『ハイデルベルク信仰問答』の言葉を思い起こします。

「わたしたちが逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来についてはわたしたちの真実なる父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということです。なぜなら、あらゆる被造物はこの方の御手の中にあるので、御心によらないでは動くことも動かされることもできないからです」（問28）